

海老名市支部 井出 こま（妻）

昭和十九年、終戦までの一年余りの日々を十五、十六歳の若者が戦争と向き合い、必死に生きてきた。その体験は戦没者の弟妹の戦中の思い出に重なる。

戦地に赴いた若者の代わりに、国を支えてきた学徒たちの生活も語り継ぎたいという思いを戦中、戦後を共に過ごした友人・中村とし子さんに託します。

学徒勤労動員

中村 とし子

昭和十六年に始まった太平洋戦争は、十九年に入ると太平洋の島々の玉砕が続き厳しい戦局になつていった。

昭和十九年三月には、全国の中学三年以上の学生に「学徒勤労動員」が発令された。戦地に赴いた若者の代わりに、約三百万人の少年少女達が学業を中断して兵器増産等に従事することになった。

厚木高女三年、四年の約三百名もこの動員令を受けて、昭和十九年七月、川崎市溝ノ口にある日本工学川崎製作所に配属された。日本光学は、レンズで有名な会社で、南武線を挟んで海軍と陸軍管轄の工場が並んでいた。主に航空機用の爆撃照準器を造っていた。五万機の航空機生産を目標に掲げる軍部にとって重要工場の一つだった。

工場には既に日大、米沢高専、小田原中、厚木中、高津高女等の学徒が大勢働いていた。

のんびりした田舎の女学生の生活は一変した。私達は通勤生、寮生に分かれ「厚木高女生らしく誇りを持って」との先生の教えを胸に、ひたすら工場に通った。この時から昭和二十年八月十五日までの一年余りの日々は、多感な十五、六歳の少女にとって強烈な体験で、六十数年経た今でも鮮やかに蘇る。

「勤労働員で何が大変でしたか」とよく尋ねられるが、大変なことはいくらでもあった。

生活必需品の欠乏…米、味噌等の配給以外売っているものは何もなかったのだ、ブラウスやモンペは手作りだった。靴だけはどうにもならず、編上靴が支給されるまで下駄で通った。依知から本厚木駅まで歩いた友達に、予備に藁草履をカバンに入れていた。

工場で…みんな慣れない仕事に一生懸命取り組んだ。機械課や硝子課等の現場に所属した人達は特に苦労が多かった。モーターが唸る大騒音の中で油まみれになりながら、誤差百分の数ミリの精度を要求される部品作りを必死で覚えた。光学花形の硝子課の作業場は二重窓になっている。冷房のない部屋の暑さは半端ではない。不良品を作らないように緊張の毎日だった。

通勤…窓からの出入りは日常茶飯事の超満員電車。アルミのお弁当箱が潰れる凄さだった。朝

はともかく帰りがなかなか乗車でできない。当時の小田急線小田原行きは三十分一本で四両編成だった。何時に家に帰れるのか、みんなで歌いながら次の電車を待つのだった。

二月の大雪の日、本厚木駅に着いたのは真夜中で心配した家族が迎えに来ていた。

寮生活：大豆の方が多いご飯、冷たい味噌汁。蚊や蚤に攻められる夜、火の気のない厳寒の寮舎。でも時にはレコードコンサートがあり、ザリガニ捕りをして栄養補給をした日もあった。

寒い日：昭和二十年は、気象台で関東大震災の年と並んで特記される寒い年だった。日頃温暖な横浜でも一月の平均気温はマイナス三・一度、雪もよく降り最高四十五センチも積もった。

暖房もなくしんと冷える工場や寮舎、オーバーもなく多摩川の川風にさらされながら電車を待ち続ける女学生達、みんな大変だった。

空襲：十九年十一月末から空襲が始まった。サイパン島から発進したB29が百機二百機と編隊を組んで攻めてきた。東京大空襲や横浜大空襲も含めて東京百回、神奈川五十二回、川崎二十回が記録されている。激しくなる空襲に寮生達は靴を履いて寝るようになった。四月十五日の空襲ではみんな「もう、だめだ」と覚悟をした。地元の方が大勢亡くなられたが、避難の途中先生の機転で近くの防空壕に飛び込み命拾いをした。そのうち艦載機が朝から襲ってくるようになった。低空で列車や人を狙うのでとても恐ろしかった。急停止した電車の窓から飛び降り雑木林に逃げ込んだことが何回もあった。六月十一日小田原中の「鍵和田武男」さんが工場で銃弾を受け亡くなられた。

「動員が始まる前に、先生達みんなまで三百人全員の顔と名前を覚えたんだよ」と戦後寺田先生

から伺った。若手の先生が召集された後の少ない人数で、生徒を守るのに必死だった先生方の御苦勞を思った。

級会で「学徒勤勞動員について一言言いたいことは」と聞いてみた。「学校でしっかり勉強できなかつたことが一番残念」という意見が圧倒的だった。まともに学べたのは二年生まで。英語は一年で中止になりその遅れを取り戻すことは出来なかつた。何でも吸収できる時を無為に過ごしたことが本当に悔いが残るということだった。

私達は七十歳を記念して『学徒勤勞動員の記』をまとめ学校や図書館に寄贈した。資料をいろいろ調べたが、戦闘や空襲で亡くなられた方達のあまりの多さに驚いてしまった。

理不尽な時代の波に沈められた方達の無念を忘れてはいけない。残された日を大切に「戦争の愚かさ」を語り継ぎたいと思っている。